

公益財団法人国土地理協会 学術研究助成

公共空間における地域言語の地名表記
—オランダ・フリースラント州の事例—

研究代表者

池庄司 規江 茨城大学学術研究院教育学野

1. はじめに

言語は単なるコミュニケーションの手段ではなく、社会的秩序と権力関係を体現する象徴体系である。ピエール・ブルデューの社会学理論は、言語の使用と選択が個人の社会的地位や文化的資本と密接に結びついていることを明らかにし、言語政策や教育制度の分析において強力な枠組みを提供する。本研究では、ブルデューの理論を手がかりに、オランダ・フリースラント州における地域言語「フリジア語」の地名表記をめぐる構築された公共空間と象徴闘争を考察する。

フリースラント州は、オランダ国内で唯一、フリジア語が公的に認められた地域であり、地名表記においてもオランダ語との併記やフリジア語単独表記が見られる。こうした表記の変化は、単なる言語的選択ではなく、地域のアイデンティティ、文化的自律性、そして象徴資本の再構築をめぐる政治的・社会的実践である。ブルデューの言う「フィールド」としての公共空間において、地名表記は言語的資本の可視化と再分配の場となり、地域言語の話者がいかにその正統性を主張し、制度的承認を獲得するかが問われている。

また、地名表記は地域住民の「ハビトゥス」にも深く関与する。日常的に目にする地名がどの言語で記されているかは、言語的感受性やアイデンティティ形成に影響を与える。とりわけ教育や行政サービスの場面において、地域言語が「正統な言語」として扱われるか否かは、話者の自己認識や言語選択に長期的な影響を及ぼす。地名表記の変更は、象徴資本の再編成を通じて、地域言語の文化資本としての価値を高める可能性を持つ一方で、非話者や移住者にとっては理解や受容の障壁ともなりうる。

本研究は、こうした言語的象徴資本の可視化と再生産のメカニズムを、地名表記という具体的な公共空間の実践を通じて明らかにすることを目的とする。フリースラント州における地名表記、地域言語保全政策、住民の受容と抵抗の諸相を分析することで、地域言語の公共的地位がいかに構築され、維持され、あるいは挑戦されるのかを検討する。ブルデューの理論的枠組みを援用することで、言語政策を単なる行政的措置としてではなく、社会的力学と象徴闘争の場として捉える視点を提示したい。

2. 地名に表象される象徴資本

2-1. 地域言語と公共空間の象徴秩序

言語は、単なる情報伝達的手段にとどまらず、社会的秩序や権力関係を体現・再生産する象徴体系である。言語の選択や使用は、話者の意図や能力だけでなく、社会的文脈や制度的枠組みによって規定される。ピエール・ブルデューはこの点を鋭く捉え、言語を「象徴的暴力」の媒体と位置づけた (Bourdieu 1991)。彼によれば、言語的表現は中立的なものではなく、話者の社会的地位、文化的資本、さらには制度的承認と密接に結びついており、言語行為そのものが社会的ヒエラルキーを再生産する力を持つ。つまり、ある言語形式が「正当」とされる背景には、教育制度やメディア、行政などの制度的権威による承認があり、それによって他の言語形式が周縁化される構造が生まれる。

この理論的枠組みは、地域言語の公共空間における可視化、特に地名表記の実践を分析する上で極めて有効である。地名は単なる地理的指標ではなく、言語的選択を通じて特定の文化的アイデンティティや歴史的記憶を表象するものであり、その表記のあり方は、どの言語が制度的に認められ、公共の場において可視化されるかという象徴秩序の再編成に関わっている。地域言語が地名表記において採用されるか否かは、単なる言語政策の問題ではなく、話者集団の社会的承認や文化的尊厳の可視化に直結する政治的・象徴的な行為である。

このような象徴秩序の再編成は、空間社会学の観点からも重要な示唆を含んでいる。Lefebvre (1991) は、空間を「社会的に生産されるもの」と捉え、公共空間における表象が社会的力学を反映することを指摘した。この視点に立てば、地名表記は空間の言語的構築を通じて、地域言語の制度的地位や話者集団の文化的承認を可視化する手段と位置づけられる。さらに、社会言語学の観点からは、Blommaert (2010) が提唱する「スケール」および「モビリティ」の概念が有効である。彼は、言語資源の価値が空間的・制度的文脈によって変動することを示しており、これは地域言語があるフィールドでは象徴資本として機能し、別のフィールドでは周縁化されるというブルデュー的分析と高い親和性を持っている。

2-2. 象徴資本としての言語景観・地域言語政策

言語景観研究においては、Landry & Bourhis (1997) の定義が広く参照されており、公共空間における言語表記が話者集団の「言語的存在感」や「象徴的認知」に影響を与えることが示されている。この枠組みは、言語が単なる情報伝達的手段ではなく、社会的承認や排除の力学を可視化する媒体であることを理論的に支持する。例えば、庄司 (2012) は、日本における多言語景観の事例を通じて、言語表記が社会的包摂と排除の両義性を持つことを論じた。福永 (2016) は東京・新大久保の「パキスタンストリート」における多言語景観を分析し、言語表記が共存と葛藤の場であることを示している。さらに、Backhaus (2007) は東京の言語景観を詳細に分析し、言語表記の選択が制度的力学と密接に関係することを指摘しており、地域言語の地名表記をめぐる分析にも応用可能であることを示唆している。

ヨーロッパにおける地域言語政策の実践としては、バスク州やカタルーニャ州の事例が豊富に蓄積されている。石井 (2007, 2011, 2013) は、バスク語の自治体名称変更を通じて、制度的言語景観が地域アイデンティティの再構築に寄与することを明らかにした。竹中 (2005, 2015) は、カタルーニャ語の言語正常化政策を分析し、教育・行政・メディアにおける地域言語の制度的保護と振興の過程を描いている。フリジア語に関しては、Graaf de (2016) がオランダ語との関係性を歴史的・制度的に整理し、清水 (2004) や大島 (2022) が言語政策と話者意識の変遷を実証的に検討している。これらの事例は、言語政策が単なる言語運用の技術的調整ではなく、地域社会における象徴秩序の再編成と深く関わることを示している。この点において、加賀美 (2000) は重要な理論的補助線を提供し

ている。加賀美は、中央ヨーロッパにおける民族集団の形成と再編の過程を歴史的・社会的に分析し、言語・宗教・歴史的記憶が地域アイデンティティの構築に果たす役割を明らかにしている。彼の議論は、地域言語の制度的可視化が、単なる行政的措置ではなく、集団の象徴的承認と文化的再定位の手段であることを示唆している。

このように、地域言語政策は、制度的言語景観の形成を通じて、話者集団の文化的尊厳や歴史的記憶を公共空間に刻印する実践であり、ヨーロッパにおける地域主義や複言語主義の理論的枠組みと連動している。山川（2010）は、ヨーロッパ教育における「複言語主義」の理念を整理し、地域言語教育の制度的意義を論じている。保城（2005）や梶島（1999）は、ポスト冷戦期の地域統合論の再編成を通じて、文化的多様性と地域アイデンティティの再評価が進んでいることを指摘しており、地域言語政策の背景理解に資する。

2-3. 地名表記の実態と象徴資本の構築

本研究は、フリースラント州における地名表記の実態を調査し、それが地域言語の象徴資本としてどのように構築・再生産されているかを分析することを目的とする。具体的には、まず、先行研究から政策的背景を把握しながら、フリースラント州（Provincie Fryslân）刊行の『De Fryske Taalatlas 2020』および『Dashboard Friese Taal』などを用いて地名表記の地域的展開を確認する。次に、公共空間における地名表記を現地調査し、言語景観の構成要素を記録・分類する。同時に、自治体職員、教育関係者、地域住民への聞き取りを通じて、地名表記に対する認識と受容の実態などを包括的に把握する。最後に、ブルデューの「象徴資本」「ハビトゥス」「フィールド」概念を援用し、地名表記が社会的承認と文化的資本の再生産に果たす役割を分析する。これらの方法を通じて、地域言語の地名表記が公共空間においていかに制度化され、象徴的価値を獲得しているかを明らかにする。また、話者集団の言語的ハビトゥスと制度的言語景観との相互作用を検討することで、地域言語政策の社会的含意を理論的・実証的に捉えることを目指す。

3. オランダにおけるフリースラント州

3-1. 研究対象地域フリースラント州と地域言語

オランダの公用語はオランダ語とフリジア語¹⁾であるものの、地域言語であるフリジア語は北部の北海沿岸のフリースラント州を中心として居住するフリジア人によって使用されている。フリジア語話者はオランダのみならず、ドイツ国内にも存在する。フリジア語は言語系統を一にしながら3つの亜系に分かれており、西フリジア語、東フリジア語、北フリジア語からなる。オランダのフリースラント州を中心に居住するフリジア人の話すコトバは西フリジア語であり、その話者数は東フリジア語と北フリジア語話者を合わせた数よりも大きいとされている²⁾。

オランダの人口周密な地域は、ロッテルダムを州都とする南ホラント州（Zuid-Holland）、アムステルダムを州都とする北ホラント州（Noord-Holland）、ユトレヒトを州都とするユトレヒト州（Utrecht）をまたぐラントスタット（環状都市群）に広がっている。

これらの地域は、ライン川をはじめとする国際河川とその支流、および運河網によって接続されている。対して、相対的に人口の少ない地域はオランダの北部に広がっている（図1）。これらの河川等を介した物流と人口規模の関係性は、中世以来変わっていない。オランダ北部のなかでもフリースラント州（Friesland）は沿岸州であるが、北海に面する部分に長細い島が点在し、その内側のワッデン海に臨むかたちでフリースラント州本土が位置する。ワッデン海は大陸棚であり、干潮時には本土から島々へ歩いて渡れるほどの浅瀬となっている。このように、フリジア語話者のホームランドであるフリースラント州は、ラントスタットから遠方に位置する人口稀薄な地域となっている。

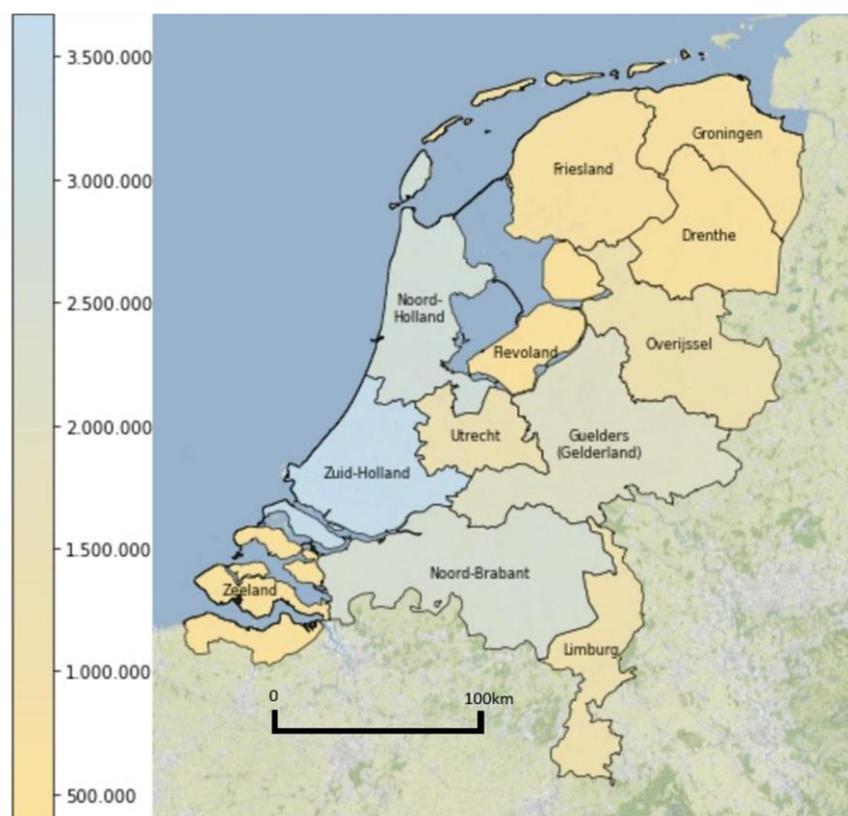


図1 研究対象地域

表1は、フリースラント州に所在するいくつかの自治体について、地名の言語別表記を整理したものである。フリースラント州における地名の表記には、言語的多様性が反映されており、自治体ごとに異なる方針が採られている。表1にした自治体は、オランダ語またはフリジア語、そして一部では方言（主にサクソン系）による名称を有しており、それぞれがどのように公式名称として扱われているかを示している。

フリースラント州内の自治体の多くが公式名称としてオランダ語地名を採用されている。例えば、Heerenveen や Leeuwarden などであり、いずれも It Hearrenfean や

表1 フリースラント州内地名と公式表記

オランダでの公式名称	市公式名称	オランダ語名称	フリジア語名称	その他(方言)名称
Dantumadiel	Dantumadiel	Dantumadeel	Dantumadiel	-
Heerenveen	Heerenveen	Heerenveen	-	-
Leeuwarden	Leeuwarden	Leeuwarden	Ljouwert	Liwadden
Sneek	Sneek/Snits	Sneek	Snits	-
Súdwest-Fryslân	Súdwest-Fryslân	-	Súdwest-Fryslân	-

Ljouwert というフリジア語地名を有するものの、公式文書や行政上の表記にはオランダ語を用いている。なお、州都レーウワールデンは、11世紀から19世紀にかけて、Ljouwert、Liwadden、Leewadden、Luwt、Leaward、Leoardia など様々な名称で呼ばれてきた(図2)。それらの名称は、フリースラント州の都市部で話されるサクソン系方言

(Stadsfries) に属した都市フリジア語(Stadsfries) と呼ばれるオランダ語を基盤としながらもフリジア語の影響を受けた都市方言や、17世紀に干拓事業のために南部オランダから移住してきた労働者たちの言語に起源を持ったビルト語(Bildts) と呼ばれる地域方言など、フリースラントにおける人びとの流入や移動の痕跡を示すものとなっている。

一方で、オランダ語とフリジア語の両方の地名を有しており、市公式名称として両言語を採用している例もある。Sneek / Snits では、オランダ語名称 Sneek がオランダでの公式

1439	Leeuwerden.	1500	Levw'd.	1654	Leurdt.	1785	Leeuwaerde.
1441	Liowerd.		Liow'rd.	1654	Levwarden.	1820	Liauwert.
1443	Ljouwerth.		Liouwert.	1660	Leevwaerden.	1821	Ljeauwert.
1453	Lijouwert.		Lieuwaerden.	1660	Leewarden.	1824	Ljeauwerd.
1457	Leowert.		Lieuwerden.	1664	Leoverdia.	1829	Lieauwerd.
1459	Lijwerth.		Leeuworden.	1541	Liuwaerd.		Ljouwert
	Lijowerden.		Leward.		Liouwert.	1831	Ljout.
1463	Leeuwardt.	1502	Lyoút.	1674	Leevwaerd.	1832	Levarden.
	Leenward.		Lyoeward.	1542	Lieuwairden.		
1467	Lyoewerdt.	1503	Leauwirden.		Leeuwairden.	1679	Leeuwert.
1469	Lyewerden.		Leauwerden.	1543	Leenwerden.		Liewerdia.
1471	Lyoerd.		Leowrd.	1550	Lieuwaarden.	1697	Luuwaarden.
	Lewde.		Lyouwerden.	1558	Levardia.		Ljouwert.
1475	Lyowerth.	1504	Liauwerden.	1561	Leowerdia.		
	Lewert.		Lyouwerdt.	1562	Lyvverdia.		1842
1477	Lijauwt.	1507	Lewardenn.	1567	Leewarden.		1844
1478	Leouwerden.	1509	Leuerden.		Lewardnm.	1701	Leeuwaarden.
	Lyoerden.	1510	Lewarden.		Leewardien.		Lieuwert.
	Leorden.	1511	Leewerd.				Leowirt.
	Leouwerd.		Luuwaerden.				Leuwert.
1479	Leuwardia.	1512	Lewardnm.				Lieuwweerd.
	Ljouwert.		Leewardien.	1570	Leouarden.		Lijourt.
	Lyoedern.	1515	Leuwirden.	1577	Lieuwarde.		Ljouwert.
	Lyoedwerden.	1516	Leeuweerden.		Leuarden.		Lieuwirt.
	Lyouwerdera.		Leuweerden.				
1482	Liewerde.	1519	Lyouwird.				

図2 様々な表記される都市レーウワールデン

出典：レーウワールデン歴史センターアーカイブ

名称であるが、市公式名称としてオランダ語名称 Sneek とともにフリジア語名称 Snits を公式名称としている。このような表記は、両言語の使用を明示的に認める形式と言える。

また、フリジア語がオランダでの公式名称として採用されている例がある。2011年に近隣の町々の合併により誕生した Súdwest-Fryslân、ならびに2014年に近隣の町々の合併によりできた（新）Dantumadiel では、フリジア語地名を市の公式名称として採用している。Súdwest-Fryslân はフリジア語名称しか有さないのに対して、Dantumadiel は Dantumadeel というオランダ語名称を有している違いがある。いずれにしても、これらの自治体ではフリジア語の市公式名称をオランダでの公式名称としており、行政上の表記においてフリジア語を優先している姿勢が読み取れる。

3-2. フリースラント州における地域言語の現状

2023年のオランダの総人口は1,794.3万である⁴⁾。このうち、65.8万人がフリースラント州居住者である⁵⁾。オランダには使用言語に関する統計がないため、オランダ語話者のみならず、フリジア語話者の正確な数は分からない。仮に、フリースラント州居住者全員がフリジア語話者と仮定すると、オランダ国内におけるフリジア語話者の割合は3.7%である。実際には、フリジア語話者はフリースラント州のほか、北西に位置するフローニンゲン州内にも居住している。いずれにしても、オランダの公用語としてオランダ語が圧倒的に優位であるため、フリジア語話者の相対的に多いフリースラント州においてもオランダ語の使用頻度が高くなりがちである。州内における住民のフリジア語の4技能に対する習熟度は図3に示すとおりである⁶⁾。フリースラント州内の住民は、2007年、2011年、2015年、2019年のいずれの年次においても、フリジア語の習熟度は「聞く」が最も高く、次いで「話す」、そして「読む」、最後に「書く」という順になっている（Provincie Fryslân 2021b）。これはフリジア語が書記言語の役割から外れ、また話者数が少ないためにフリジア語での出版物が極めて限られているために、「書く」・「読む」の技能が伸びにくいことを反映している。しかし、経年変化に着目してみると、「聞く」・「話す」の変化は相対的に小さいのに対して、「読む」・「書く」の習熟度の向上が見られる。

このような習熟度の傾向は、地域言語教育政策の違いからも説明可能である。例えば、カタルーニャ語やガリシア語、そしてバスク語においては、学校教育における地域言語の使用が義務化されており、初等教育から高等教育に至るまで体系的な言語教育が実施されている（萩尾 2020, Flors-Mas and Manterola 2021, Wang 2023）。その結果、これらの地域では「読む」「書く」技能の習得が比較的高い水準で安定しており、地域言語の書記言語としての機能も強化されている。特にバスク語の場合、言語復興政策の一環として教育制度における言語使用が積極的に推進されており、若年層の言語能力向上に顕著な成果が見られる。一方、フリジア語の場合、教育現場における使用は限定的であり、言語政策の実効性や教育資源の充実度に課題が残る。したがって、フリジア語の「読む」「書く」技能の向上は一定の成果を示しているものの、他の地域言語と比較すると制度的支援の差が依然

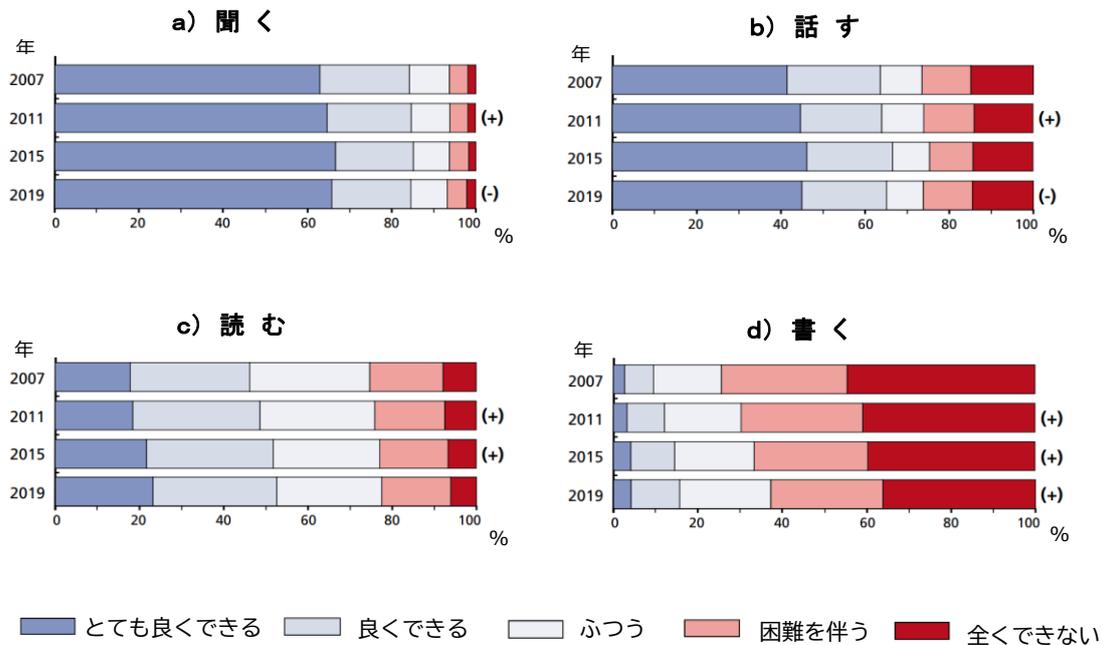


図3 フリースラント州における地域言語(フリジア語)の4技能に対する習熟度

出典：Provincie Fryslân. 2021. *Dashboard Friese Taal*. に加筆

として大きく、今後の言語政策の展開が習熟度向上の鍵を握ると考えられる。

なお、州による母語に関する調査結果によれば、回答者の半数を上回る 57.3%がフリジア語を部分的に母語（の一つ）と見なしているという（Provincie Fryslân 2021b）。使用機会としては、パートナーとは 43.1%が日常的にフリジア語を使用すると回答している。それよりもわずかに多い 49.2%はパートナーとの会話にオランダ語を使用している。2015年と2019年とを比較すると、2019年では母語として複数の言語を選択できるようになったものの、パートナーとのフリジア語使用率は 45.6%から 43.1%に減少している。また、子どもたちとの会話はフリジア語（45.1%）よりもオランダ語（49.7%）がより頻繁に使用されていることが明らかになっている。こうした状況もあって、57.6%の子どもたちの間ではオランダ語が使用されている。こうした家庭での使用言語の変化が先のフリジア語の4技能の習熟度に影響を与えている可能性が大いにあろう。「読む」・「書く」の習熟度は年を経るにつれて高くなっている一方で、「聞く」・「話す」は2015年から2019年にかけて低下している。

4. フリースラント州における地域言語保全政策と地名表記

4-1. フリースラント州における地域言語保全政策

表2は州内の自治体における言語政策の有無と自治体内のオランダ語地名あるいはフリジア語地名の数とその割合を示している⁷⁾。18地域のうち15地域が言語政策を策定しており、たとえ自治体内にフリジア語の地名がなくとも言語政策を持つハーリンゲン（Harlingen）やオースターステリングヴェルフ（Ooststellingwerf）も含まれている。言語政策未策定の地域は南部に位置するウェストステリングヴェルフ（Weststellingwerf）のほかは、すべて島嶼地域に当たる。フリジア語地名は州内に167あり、これは州内地名の38.5%に相当する。フリジア語地名を有する地域は、先に述べたフリジア語を母語（の一つ）と認識している人々が多く居住する地域とある程度一致している。フリジア語地名は北東地域ならびにレーウワールデン、そしてレーウワールデンの周辺に位置する地域で多くなっている。

表2 州内の各自治体における言語政策の有無とオランダ語／フリジア語地名の数と割合

地域	言語政策の有無	オランダ語地名		フリジア語地名	
		数	割合 (%)	数	割合 (%)
Achtkarspelen	○	12	100.0	0	0.0
Ameland	×	4	100.0	0	0.0
Harlingen	○	3	100.0	0	0.0
Ooststellingwerf	○	13	100.0	0	0.0
Schiermonnikoog	×	1	100.0	0	0.0
Terschelling	×	12	100.0	0	0.0
Vlieland	×	1	100.0	0	0.0
Weststellingwerf	×	26	100.0	0	0.0
De Fryske Marren	○	45	88.2	6	11.8
Opsterland	○	14	82.4	17	17.7
Smallingerland	○	11	78.6	3	21.4
Heerenveen	○	16	76.2	5	23.8
Súdwest-Fryslân	○	54	60.7	35	39.3
Noardeast-Fryslân	○	29	54.7	24	45.3
Waadhoeke	○	21	51.2	20	48.8
Leeuwarden	○	5	13.9	31	86.1
Dantumadiel	○	0	0.0	10	100.0
Tytsjerksteradiel	○	0	0.0	16	100.0

出典：Provincie Fryslân. 2021. *De Fryske Taalatlas 2020*. Kolofon.

4-2. フリースラント州における地名表記

フリースラント州内の地名の4割弱がフリジア語地名であることを念頭に置きながら、公共空間における言語表記について2023年12月に島嶼部地域を除く全自治体を対象に現地調査を行った。その結果は表3に示した。フリジア語地名を有する・有さないにかかわらず、公共空間における言語表記はオランダ語のみが卓越する結果となった。フリジア語をオランダ語と併記する自治体は14のうち6（42.9%）にとどまっており、フリジア語地名を有する自治体であっても二言語表記の割合は50.0%であった。フリジア語地名の多

表3 州内の各自治体における公共空間における言語表記

自治域 言語表記	市役所			図書館			街路/道路			駅/バス停			備考
	蘭	フ	英	蘭	フ	英	蘭	フ	英	蘭	フ	英	
Achtkarspelen	2	1	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	ANWB案内板（蘭・独・英）
Harlingen	1	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	ANWB・MRB案内板（蘭・独・英）
Ooststellingwerf	1	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	
Weststellingwerf	1	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	
De Fryske Marren	1	2	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	Museum Joure装飾・土産
Opsterland	1	-	-	1	-	-	1	2	-	1	-	-	MRB案内板（蘭・独・英）
Smallerland	1	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	
Heerenveen	1	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	ANWB案内板（蘭・英・独）
Súdwest-Fryslân	1	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	
Noardeast-Fryslân	1	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	
Waadhoeke	1	2	-	1	-	-	1	2	-	1	-	-	市案内板（蘭・英）
Leeuwarden	1	-	-	1	-	-	1	-	(1)	-	-	1	市役所装飾
Dantumadiel	2	1	-	1	-	-	1	1	-	1	-	-	
Tytsjerksteradiel	2	1	-	1	-	-	1	1	-	1	-	-	

蘭：オランダ語、フ：フリジア語、英：英語、独：ドイツ語

数字は使用順位を示す。（ ）内表記は必要箇所のみ表示の場合を示す。

ANWB：オランダ王立観光協会

MRB (Marrekrite Recreation Board)：公益財団法人水陸レクリエーション・インフラ整備委員会

現地調査により作成

い、例えばダントゥマディール (Dantumadiel) やワードフック (Waadhoeke) といった自治体では、図4や図5のように二言語表記となっている。しかし、ドゥ・フリスク・マーレン (De Fryske Marren) のようにオランダ語地名が圧倒的に多い自治体であってもフリジア語を積極的に使用しようとしているところもある。図6は、ドゥ・フリスク・マーレン市庁舎内の手続きブースであり、それぞれにフリジア語でブース番号1から4の数字を文字で表記している。オランダ語が優位な地域でありながら、フリジア語を図6のように積極的に表記しているものの、フリジア語は装飾的に扱われていることが分かる。また、スマリンヘルラント (Smallerland) の中心地ドラフテン (Drachten) もオランダ語卓越地域であるものの、市内のメインショッピングストリートに設置された円形オブジェの内側にはフリジア語が書かれている (図7)⁸⁾。加えて、レーウワールデンのような観光客が多い地域においてはオランダ語と補助的に英語が使用されていたり (図8)、オプステルラント (Opsterland) の広域な自転車旅行案内版は、オランダ語・ドイツ語・英語で表記されていたりする (図9)。

以上の調査結果から明らかになったのは、フリースラント州における公共空間での言語表記が、制度的な言語多様性の存在にもかかわらず、実際にはオランダ語に大きく偏っているという現状である。フリジア語地名を有する自治体であっても、二言語表記が必ずし

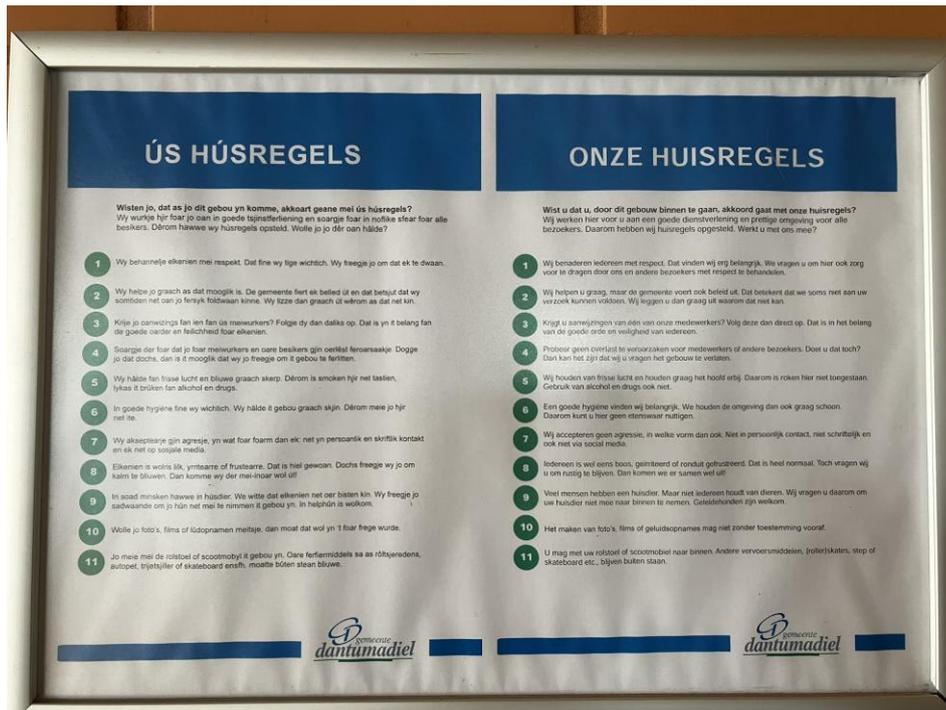


図4 ダントウマディルの市庁舎内の二言語表記
(2023年12月 池庄司撮影)



図5 ワードフックの市内の二言語表記
(2023年12月 池庄司撮影)



図6 ドゥ・フリスク・マーレンの市庁舎内のフリジア言語表記
(2023年12月 池庄司撮影)



図7 スマリンヘルラント市内のフリジア語表記
(2023年12月 池庄司撮影)



図8 レーウワールデン市内のオランダ語表記と補助的英語表記
(2023年12月 池庄司撮影)

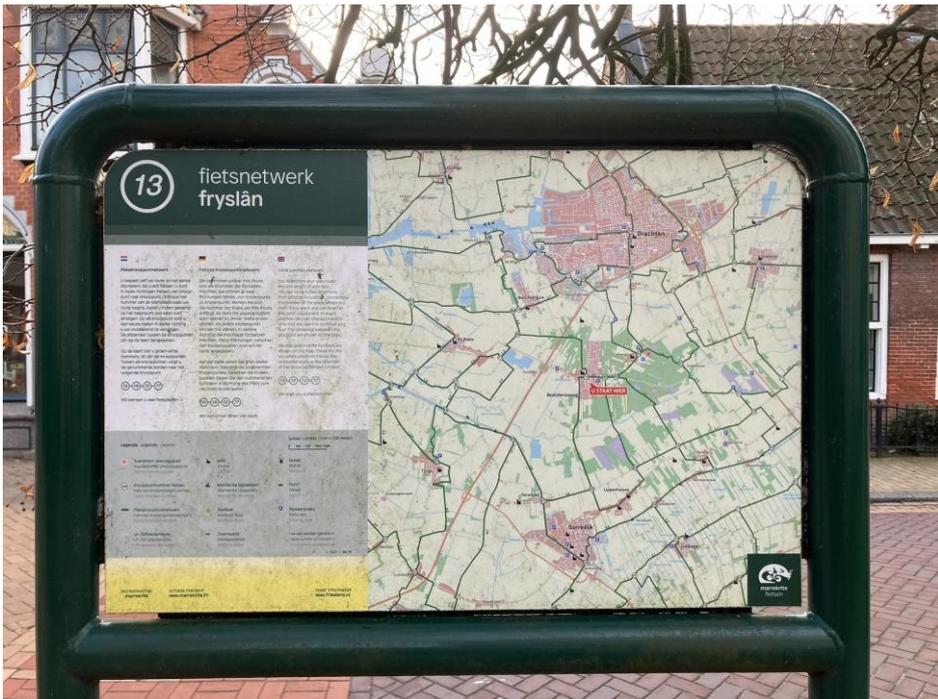


図9 オプステルラントの自転車旅行案内版のオランダ語・ドイツ語・英語表記
(2023年12月 池庄司撮影)

も採用されているわけではなく、むしろ限定的であることは、地域言語の視認性と実用性
の間に乖離があることを示している。

一方で、フリジア語が装飾的に用いられている事例や、観光・文化的文脈で象徴的に配
置されている場面は、言語が単なる情報伝達手段を超えて、地域のアイデンティティや文
化的表象として機能していることを示唆する。特に、オランダ語が優勢な地域におい
ても、フリジア語が空間的に「可視化」されている事例は、言語の象徴的価値が公共空間
において一定の役割を果たしていることを物語っている。

5. まとめ—地域言語の維持継承に対する住民の受容と抵抗の諸相—

本稿では、フリースラント州における地域言語保全政策と公共空間における地名表記を
現地調査に基づいて明らかにしてきた。特に、フリジア語が制度的に認められた地域言語
であるにもかかわらず、公共空間においてはオランダ語が圧倒的に優勢であるという現状
は、言語の象徴資本としての機能が限定的であることを示している。言語が単なるコミュ
ニケーション手段ではなく、空間や権力、アイデンティティと結びついた象徴的資源であ
るという視点から見れば、フリジア語の可視性は地域社会における文化的承認の度合いを
映し出す鏡である。

調査結果からは、フリジア語地名を有する自治体であっても、公共空間における二言語
表記の採用率は50%程度にとどまり、地名の言語的由来と表記実態との間に乖離があるこ
とが確認された。これは、象徴資本としての言語が制度的に認知されていても、実際の空
間配置や視覚的表現においては十分に活用されていないことを意味する。言語が象徴資本
として機能するためには、単に存在するだけでなく、公共空間において「見える化」さ
れ、住民や訪問者の目に触れることで意味を持つ。その意味で、標識や案内板、建物の表
記は、言語の象徴的価値を空間的に体現する重要な媒体である。

一方で、フリジア語が装飾的に用いられている事例や、文化的演出として配置されてい
る場面も複数確認された。例えば、ドゥ・フリスク・マーレン市庁舎内の手続きブースに
おけるフリジア語表記や、ドラフテン市内の円形オブジェに刻まれたフリジア語などは、
言語が実用性を超えて象徴的意味を帯びていることを示している。これらの事例は、言語
が地域のアイデンティティや文化的誇りを表現する手段として機能していることを物語っ
ており、象徴資本としての言語の可能性を示唆するものである。地域社会においてフリジ
ア語がいかに「生きた言語」となるかにも、今後の言語的景観の形成が重要な鍵となっ
てくるであろう。

また、言語の活性化については、教育の場におけるフリジア語の学習が大きな課題とな
ろう。現在、フリースラント州では小学校での教育においてフリジア語とその文化の学習
が導入されており、歌や物語、地域の伝承などを通じて児童が言語と文化に親しむ機会が
設けられている。さらに、2030年には中学校段階でもフリジア語教育の導入が予定されて
おり、言語継承を初等教育から中等教育へと接続する取り組みが進められている。これ

は、象徴資本としての言語を次世代に継承するための制度的基盤を築く試みであり、地域言語の可視性を教育の中で持続的に確保する意義は大きい。

しかしながら、こうした教育政策の実施にはいくつかの課題が伴う。第一に、フリジア語に堪能で、かつ教育現場で指導可能な教員の確保が困難であるという現実がある。特に中学校段階では、言語運用能力に加えて文法・文学・文化史などの専門的知識が求められるため、教員養成の体制整備が急務となっている。第二に、グローバル化の進展に伴い、英語の重要性がますます高まっていることも、地域言語教育の推進にとっては逆風となり得る。保護者や教育関係者の中には、英語教育の時間を確保するためにフリジア語の授業を削減すべきだとする意見もあり、地域言語が児童生徒の学習負担を増やす「足かせ」として捉えられる懸念も存在している。

このように、フリジア語は一部自治体で積極的に表記されているものの、公共空間においては象徴資本としての位置づけにとどまり、実用的・制度的資本としての展開は限定的である。言語の可視化が地域アイデンティティの構築に寄与する一方で、その実効性は空間的・教育的・機能的制約の中で揺らいでいる。言語政策が単なる文化保護にとどまらず、教育と空間の両面で持続可能な形で根付くためには、教員養成、カリキュラム設計、社会的合意形成の三位一体の取り組みが不可欠である。地域言語が未来の世代にとって「誇り」として機能するためには、それが教育の中で「負担」ではなく「資源」として認識されるような環境づくりが求められている。公共空間における言語表記のあり方と教育現場での言語育成は、象徴資本としての言語の持続可能性を左右する両輪であり、今後の言語政策において統合的に検討されるべき課題である。

注

- 1) 日本語表記にした場合、フリジア語のほか、フリース語、フリスク語、フリスケ語などの表記も認められる。本稿では日本語の学術用語として最も頻出し、また英語の発音フリースランに近似するフリジア語を用いる。
- 2) 西・東・北の区分は言語学上の類型であるため話者の主観的な心情とは一致しないことから、正確な話者数は不明となっている。また、言語学上はフリジア語と区分されているものの、それぞれの亜系を統一するような標準語が生じなかったため、実際にはフリジア語群と呼ぶのが適切との見方もある。清水誠. 2004. 「フリジア語とフリジア人について」『独語独文学研究年報（北海道大学）』31, 82-98.
- 3) 中世から近世にかけて北部ドイツ地方一帯を支配したザクセン公国を、1500 - 1539 年にかけて統治した。その間、父の代に進出したフリースラントで
- 4) Centraal Bureau voor de Statistiek の HP より
<https://www.cbs.nl/nl-nl/>（最終閲覧日：2024 年 8 月 16 日）
- 5) De provincie Fryslân の HP より
<https://www.fryslan.frl/>（最終閲覧日：2024 年 8 月 16 日）

話者 65 万という数は、ヨーロッパのなかにおいて約 500 万人の話者を有するカタルーニャ語、約 160 万人の話者を有するガリシア語に次ぐ数値であり、約 60 万人の話者を持つバスク語と同規模である。このことから、オランダ国内においてわずか 3.7%とは言え、他の地域言語と比較しても少なくないその話者数から、その言語に象徴資本としての役割を見出そうとすることは決して過剰な主張ではなく、むしろ言語の社会的価値や文化的認知度を高めるうえで妥当な試みであると言える。

- 6) フリジア語に関する調査はフリースラント州が 2007 年、2011 年、2015 年、2019 年に州内住民のうち、1600 世帯を対象として行っている調査の結果である。1600 世帯は全世界の概ね 7.1%に相当し、このうち、いずれの年次も約 6500 名から回答を得ている。調査はデジタルと紙媒体の両方で実施されている。
- 7) ここでいうオランダ語地名／フリジア語地名は旧自治体レベルの地名を指す。
- 8) 円形オブジェの外側にはオランダ語が書かれている。

参考文献

- 石井久生. 2007. 「境界地域における地域の制度化とバスク語話－エリオシャ・アラバラ郡の事例－」『共立国際文化』24, 31-56.
- 石井久生. 2011. 「バスク州にみるボーダーランドの言語景観－基礎自治体名称バスク語化の事例から－」山下清海編『現代のエスニック社会を探る－理論からフィールドへ－』（学文社）147-167.
- 石井久生. 2013. 「制度により構築される言語景観－バスク州とナバラ州における基礎自治体改名の実践－」『共立国際研究（共立女子大学）』30, 39-61.
- 椛島洋美. 1999. 「ポスト冷戦期における国際統合理論の視点－オープン・リージョナリズムの批判的検討－」『政治研究』46（九州大学法学部政治研究室）, 83-128.
- 加賀美雅弘. 2000. 「中央ヨーロッパにおける民族集団の諸相」『東京学芸大学紀要 第3部門（社会科学）』51, 55-76.
- 大島規江. 2022. 「ヨーロッパにおける地域言語－オランダのフリジア語を中心に－」『茨城大学教育学部紀要（人文・社会科学・芸術）』71, 27-38.
- 清水誠. 2004. 「フリジア語とフリジア人について」『独語独文学研究年報（北海道大学）』31, 82-98.
- 庄司博. 2012. 「多言語化と言語景観－言語景観からなにがみえるか」庄司博／バックハウス P.・クルマス, F. 編『日本の言語景観』（三元社）17-32.
- 竹中克行. 2005. 「カタルーニャのカタルーニャ語－言語正常化政策の道程と将来への展望」坂東省次・浅香武和編『スペインとポルトガルのことば』（同学社）37-57.
- 竹中克行. 2015. 「カタルーニャ自治州におけるカタルーニャ語の保護と振興」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』49, 79-106.

- 萩尾 生. 2020. 「『少数言語』の対外普及：バスク語とカタルーニャ語の事例をスペイン語と比較しつつ」『東京外国語大学世界言語社会教育センター論集』 **10**, 35-50.
- 保城広至. 2005. 「地域統合論から「新しい」地域主義論へ—なぜ廃れ、かく蘇ったのか—」ISS ディスカッション・ペーパー・シリーズ J-216 (東京大学社会科学研究所), 1-19.
- 福永永由佳. 2016. 「「パキスタンストリート」の多言語景観—承認、排除、そして共存へ」『ことばと社会』 143-151, 三元社.
- 山川智子. 2010. 「『ヨーロッパ教育』における『複言語主義』および『複文化主義』の役割」細川英雄・西山教行編『複言語・複文化主義とは何か—ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ—』(くろしお出版) 50-64.
- Backhaus, P. 2006. *Linguistic Landscapes: A Comparative Study of Urban Multilingualism in Tokyo*. Multilingual Matters.
- Blommaert, J. 2010. *The Sociolinguistics of Globalization*. Cambridge University Press.
- Bourdieu, P. 1991. *Language and Symbolic Power*. Harvard University Press.
- Flors-Mas, A. and Manterola, I. 2021. The Linguistic Models of Compulsory Education in the Basque Autonomous Community and in Catalonia: A comparative view. *Journal of Language and Law* **75**, 1-18.
- Graaf de, T. 2016. Dutch, Frisian and Low German: The State Language of the Netherlands and its Relationship with two Germanic Minority Languages. *Scandinavian Philology* 14-2, 30-52.
- Landry, Rodrigue & Bourhis, Richard Y. 1997. Linguistic Landscape and Ethnolinguistic Vitality: An Empirical Study. *Journal of Language and Social Psychology* 16(1), 23-49.
- Lefebvre, Henri. 1991. *The Production of Space*. Blackwell.
- Provincie Fryslân. 2021a. *Dashboard Friese Taal*. Provincie Fryslân.
- Provincie Fryslân. 2021b. *De Fryske Taalatlas 2020*. Kolofon.
- Wang, T. 2023. Educational Language Policy in Spain and Its Complex Social Implications. *International Journal of Arts, Humanities and Social Science*, **2-4**, 1-11.